



御改革割合ニ玉村宿萬日堂へ出向申候、高百石ニ付  
丁銭九百五十三文據る

但し惣高巻万式千六百九拾石五斗五升九合  
内 千六百廿九石五斗三合玉村宿高除之  
引残而

惣万千六百拾石五斗六合ニ而割  
此節割  
百九ノ七百四拾文

丁銭ニ而百五ノ三百五拾式文  
高百石ニ付

丁銭九百五拾式文五分ヲ三ノ久ニ直シかける也  
同席ニ而俵半相談もいた須、大横利割金巻兩式分  
也、甚右衛門殿努力蔵殿・竹内佐七殿兩人に渡入、亦  
来月二日福野總代取極、口留御普請割合特參相談ヲ  
いた須、且ツ下瀧村清蔵殿、勝右衛門殿ヲ以、大惣代  
退役願ヲ出ス

夫是夜深キ迄談事、一同引取、拙者中下田村係兵衛  
殿と同伴、同人宅へ一寸立寄り、下男弥介ニ被送端ル、  
会合人、角濱村組頭市郎右衛門殿・上ノ手村名主淺右  
衛門殿・飯嶋村名主傳六殿・上茂木村壺頭紋蔵殿・此  
人後箇・下茂木兼、小泉村佐助殿・下ノ宮村五兵衛殿  
俵・箱石村定右衛門殿・南玉村名主宗蔵殿・中下田村  
組頭孫兵衛殿・飯井村名主淺五郎俵・瀧新田組頭國蔵・  
上瀧村兼中瀧村勘右衛門殿・横手村三四郎殿・萩原村  
名前不知・西橋手同断・中大瀧村同断・下瀧同断・八  
幡原同断・宇實村不出・下下田村名前不知・玉村宿力  
蔵殿・好四郎殿兩人ニ私也

### 待望の玉村町誌別巻Ⅳ

## 「三右衛門日記(一)」がここに発刊されました。

この度玉村町では「三右衛門日記(一)」を刊行いたしました。この日記は天保の改革に当り玉村宿寄場組合の大総代を務めた渡辺三右衛門の「御用私用諸日記」であります。

日記は天保十三年暮から明治二年十月まで、二十八年間二九冊総丁数四七〇九丁、第一巻はその冒頭、天保十三年から弘化三年までを取めました。三右衛門は玉村宿寄場組合以外の沼田町・妙義・山田郡方面を始め各地に子分を配しその数五〇名に達しております。従って各地の情報をいち早く得る事が出来、関東取締出役やその家来の道案内の者(自明)と連絡して、天保改革行政の末端を担わされた人物といえます。又大の世話好き、且つ健脚で各地へ出向き或はその依頼で軽犯罪の貰い下げや、江戸の地頭旗本の用人と連絡して先納金の値下げに力を盡したりしています。その実力は世間一般に広く知られていたらしく、川越藩土前橋陣屋の郡奉行が新任挨拶に来て本人不在の時は日を改めて直接本人に挨拶をした程です。内容は関東取締出役との連絡、目明悪事の摘発、飯売下女の救済、喧嘩の仲裁、結婚離婚の仲立、博奪取締り、欠藩人の善後策、開田の世話、借金貸金の仲立、等々、一読興味尽きない事項で一杯です。

年次を追って続巻を出す予定ですので幕末黒船来航の頃の地方庶民の生活に興味ある方、又その方面の研究の資料にお使いになる方、是非御高覧下さいませ御願いたします。

### 目次

口絵 三右衛門日記二十九冊・三右衛門七十六歳像・日記(嘉永三年九月二十八日国定忠次郎宿預り、嘉永二年四月五日唐丸籠造作法、慶応二年六月十八日打こわし)・三右衛門位牌・三右衛門夫妻の墓・渡辺家母屋

序 ..... 玉村町長 井田 金 七  
三右衛門日記の刊行を祝す ..... 群馬県地域文化研究協議会会長 近藤 義 雄

凡例 .....  
解説 ..... 一 弘化二年 ..... 二五五

天保十三年 ..... 六一 弘化三年 ..... 三六七

天保十四年 ..... 六一 日記摘要 ..... 四三一

天保十五年 ..... 一一二 あとがき ..... 四九九

### 装丁

A5判  
上製本  
貼箱入り  
総頁.....五〇二頁  
口絵カラー.....八頁

### 第二巻

弘化五年より嘉永三年まで  
この巻には国定忠次郎召捕、  
取調護送の一件が注目すべ  
き項目です。

玉村町誌刊行委員会